

# 環境芸術学会 2021 年度春季研究発表大会プログラム

開催日時: 2021 年 5 月 16 日(日) 9:30~16:15

実施方法: 遠隔会議システム「Zoom」を活用した口頭発表

聴講参加: 【無料】

申し込み: 以下のアドレスにアクセスし申し込みをお願いします(4 月 19 日 10:00~5 月 16 日 9:00 まで)。

URL <https://iead-spring2021-01.peatix.com/>

※当日は Zoom の名前を本名に設定して下さい。

## 発表プログラム

### 学生会員の部

#### 1, 室内環境に応じて変化するメディアアートの制作 工学技術を利用した芸術表現

煙山 千夏(新潟大学大学院自然科学研究科)

芸術は生活を豊かにするという考えのもとに、住空間への芸術の浸透を目的としたメディアアート作品を制作しました。近年注目が高まっている熱中症に着目し、エッジライトを用いて住空間の温湿度の変化を表現することで、本作品が住空間の問題解決装置となることを目指しました。

#### 2, パブリックアート研究 コミュニティ形成における市民参加手法の類型化

林 晨曦(東海大学 芸術学研究科)

パブリックアートやアートプロジェクトの成立や変遷、また文化政策などの分野について研究が進められているが、市民参加手法を類型化するなどの研究は少なく、これからの課題である。本研究は市民参加型のパブリックアートの事例を通じて参加手法を類型化することを目的としており、今回はその途中経過の発表を行う。

#### 3, 人と風景の関係性 anima piantaの制作と展開 人と風景の関係性及び風鈴について

土田 恭平(東京藝術大学美術研究科デザイン専攻)

江戸時代には花見のように虫の声を聴きに出かける文化がありました。しかし、現在では風景といえは目で見るものであり、人はより視覚優先的な生活を送っています。かつての人と風景の関係性から、例えば風鈴が生まれたとしたら、今の人と風景の関係性からは何が生まれるだろうか。そうした問いから制作を始めました。

#### 4, 音視 - ONSHI - 音の視覚表現

藤間 勝哉(新潟大学大学院自然科学研究科)

インタラクティブアートによる音を視覚化した作品について報告する。本作品では、作品内の電子ピアノの演奏者、周囲の鑑賞者など老若男女問わず幅広い対象者を想定し、どの対象者も容易に理解できる音と鍵盤と映像との相互をつなげる映像化を目指した。

#### 5, 動く照明「YU-RA」の社会実装プロジェクト チーム制作における、完成に基づく製品開発と実証実験

武藤 琴音(東京藝術大学美術学部デザイン科)

太陽の光の届かない閉鎖的な空間では、時間の感覚を見失いがちである。動きのない空間に、時間経過で移動・変化する照明を配置することで、揺らぎと移ろいを与えることができないのではないかと考え、作品を制作している。

#### 6, 環境との共存を目指した作品「彼ら」について インスタレーション作品の可能性

中山 夢音(東京藝術大学)

環境からの影響を受けて完成する作品は、環境の影響を受けにくい作品とどのような点が相違しているか。鑑賞者との関わり、鑑賞者はどのような感覚と感想を持つか。環境の影響を受けることのメリットとデメリットはなにか。

### 一般会員の部

#### 7, 「遊び」を取り入れたアートの展開 紙製積み木の可能性について

高橋 綾(群馬県立女子大学)

作者考案の「遊び」を取り入れた紙製アート作品「メッセージブロック」「虹のクネリ」(大型)、「スウ」(小型)などの新たな可能性を探る。今回は株式会社タカムラ産業の協力の元、コスト面を考慮した量産型のメリット、デメリットを探る。

#### 8, Virtual Reality における散策空間 Little Town

長谷 海平(関西大学)

私たちは未来の現実空間を課題として作品制作している。VR 作品「Little Town」はその第一歩として、人とまちの関係をシンプルに取り出したものである。未来の現実空間では、バーチャル技術が当たり前になり組み込まれていると私たちは考える。そして、まちに対して情報をダイレクトに積み重ねる機能をバーチャル技術が担い、まちの変化に対するスピード感も加速する。本作品はその未来の現実空間によってもたらされる感覚を表現したものである。

#### 9, 美術作品の価格を形成する要素に関する考察

竹田 直樹(淡路景観園芸学校)

今日の私たちが暮らす資本主義社会における美術作品の価格が、どのような要素によって、どのようにして形成されているのか、そのメカニズムについて考える。特に、2021年になってから話題になっているクリプトアートに着目した考察を行う。

#### 10, 心地よいという学修成果 変化した環境下で取り組む美術教育実践から

菫浦澤 侑(文京学院大学人間学部)

本研究発表では、環境が激変する中で行われた美術・教育的な営みが人に与える影響について検討する。感染症拡大により実施されたオンラインによる美術教育授業実践(保育者・教育者育成に関わる科目)において得られた学生自身の記述に表れている、心地よさや開放感、気楽さ等を、学修の成果として捉えることに試みる。

#### 11, 具体美術協会の美術の特性

田中敦子を中心に

趙 採沃(倉敷市立短期大学)

具体美術協会(1954年~1972年)は吉原治郎をリーダーとする関西の前衛団体の一つである。同団体はタビエによりアンフォルメル美術の先導的なグループとして評価された。田中敦子は具体美術協会の一人として、1955年から1965年まで在籍しながら電気服、バル、パフォーマンス、インスタレーションなど多様な美術活動を行った。本研究の目的は具体美術協会における田中の作品の意味を考察することである。

#### 12, 工学と芸術の融合表現を探る 工学部3年生3名による研究成果展実践報告

三村 友子(新潟大学)

令和3年2月に開催した新潟大学工学部人間支援感性科学プログラム三村研究室の所属学生3名による研究成果展の実践報告。「空間との関わり」「人との関わり」をキーワードに、各々のテーマのもと工学と芸術の融合表現を探りながら制作した作品及び展示企画運営・発表と今後の展開。

#### 13, アートプロジェクトにおける「笑い」のはたらし 新型コロナウイルス感染拡大予防のための漫画冊子を事例に

東方 悠平(八戸工業大学)

ユーモアや笑いの要素を含んだ美術作品やアートプロジェクトの持つ意味や可能性について実践報告を元に考察を行う。

#### 14, おさむシアター 一鉄道の廃車両を活用したミニシアター

小佐原 孝幸(常磐大学人間科学部コミュニケーション学科)

《おさむシアター》は、ひたちなか海浜鉄道湊線の那珂湊駅の敷地内にある廃車両ケハ601を転用したミニシアターである。眠っている地域資源を新たな場として再生する。2011年~2019年までに行われたその取り組みを紹介する。

#### 15, 農山村地域のオーセンティックーションにむけた地元参加型アートによる社会ネットワークの構築

まちづくり・建築ユニットDoobu大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ出展活動を事例として

永野 聡(立命館大学)

新潟県十日町市および津南町にて、3年に一度開催される国際芸術祭(大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ)に、アーティストとして作品を制作する事を通して、地域住民、行政、実行委員会とネットワーク変遷(2009年~2021年)を分析考察する。